



文學士

兒山信一編

兒山信一編

新抄

萬

葉

集

立川書店發兌

昭和三年四月十日印刷  
昭和三年四月十五日發行

定價金壹圓參拾錢

編者 兒山信一

大阪市南區安堂寺橋通三丁目四拾五番地

發行者 立川熊次郎

大阪市西區阿波座二番町三番地

印刷者 北隅茂

著者 新抄  
版權 所有

(集葉萬)抄新

發行所

大阪府南區安堂寺橋通三丁目四拾五番地  
出版業籍

立川文明堂

電話船場一九四番  
振替大阪一四六一番



## 緒言

一、本書は高等専門學校程度の教科用書として編纂したものであります。

一、歌の順序はすべて原本の順序に従ひました。萬葉集の原形から離れてその歌を或は作者別に、或は年代順に、或は歌體別に、或は類歌的に整理して排列する方法は、それぞれ有効な場合が少くないとは思ひますけれども、さういふ方法はむしろ萬葉集なるものを一通り會得した上でなほ進んで研究しようとする人たちに必要なことであつて、はじめには原形のまゝの萬葉集を理解することが何よりもまづ必要であらうと思ひます。それには原形のままで讀むのが最善の方法ですけれども、教科用としては時間の不足その他の事情から完本が不適當である場合があります。そこで原本における卷の順序に従つて適當な歌を選出したところの抄本が比較的都合合

がよいのではないかと思ふのです。

一、歌の選出の標準は、作品として価値の高いもの及び萬葉集なるものの特質を示してゐるものといふ二點であります。

一、なるべく原形に近いものと念じます故に、原本において一纏めになつてゐる歌、殊に連外的の傾向を持つたものは、なるべく全部をそのまま採録するといふ方針です。贈答の歌や長歌に添へられた反歌なども、なるべくそのまゝの形で採録するやうにしました。

一、訓は佐佐木信綱氏の新訓萬葉集を基として、古義及び略解をも参照しました。なるべく正確な訓であるやうにと願ひつつ、また従來一般におこなはれてゐる訓にも、相當の注意は拂ひたいと思つたのです。

一、頭註のあまりに多いことは、教授の實際において、教授者の考を束縛することが

あり、被教授者の自發的勉學を妨げることがないとも限りませんので、語釋の類はすべて省略し、その他も適當と思ふ程度にとどめました。

一、萬葉集の歌で古今集以後の勅撰集に採録せられてゐるものの一部分を頭註に掲げました。この點については田中道麿の撰集萬葉徴などについて研究せられたいと思ひます。

昭和三年三月

兒 山 信 一

# 目次

|    |     |
|----|-----|
| 卷一 | 一   |
| 卷二 | 二   |
| 卷三 | 三七  |
| 卷四 | 四四  |
| 卷五 | 五六  |
| 卷六 | 七一  |
| 卷七 | 八九  |
| 卷八 | 九七  |
| 卷九 | 一〇九 |

|      |     |
|------|-----|
| 或る手紙 | 三〇七 |
| 南 京  | 三〇五 |
| 敵將軍  | 三〇九 |
| 眼    | 三一一 |
| 步哨線  | 三〇九 |
| 解説   | 三九  |

|      |     |
|------|-----|
| 或る手紙 | 三〇七 |
| 南 京  | 三〇五 |
| 敵將軍  | 三〇九 |
| 眼    | 三一一 |
| 步哨線  | 三〇九 |
| 解説   | 三九  |

附 錄

用 字 例

二四八

訓 點 例

二五二

主要註釋書目

二五五

目 次 終

目 次

新抄 萬葉集

卷一

雜歌

○天皇は雄略天皇。

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

天皇御製歌

収めり勝てりや  
う甲つ

籠もよ み籠持ち ふぐしもよ みふぐし持ち この岡  
に 菜摘ます兒 家聞かな 名のらさね そらみつ や  
まとの國は おしなべて 吾こそ居れ しきなべて 吾  
こそませ 吾こそはのらじ 家をも名をも

籠毛與美籠母乳布  
久思毛與美夫君志  
持此岳爾菜探須兒  
家吉閑名告沙根虛  
見津山跡乃國者押  
奈戸手吾許曾居師  
吉名倍手吾己曾座  
我許背齒告自家乎  
毛名雄毛

○天皇は舒明天皇。

ヤマト

高市岡本宮御宇天皇代

ゆへに足りヲナル

天皇登香具山望國之時御製歌

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り

立ち 國見をすれば 國原は 煙立ち立つ 海原は 鷗

立ち立つ うまし國ぞ 秋津島 大和の國は

幸讚岐國安益郡之時軍王見山御歌

霞たつ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず む

らぎもの 心を痛み めえこどり うらなげをれば 玉

だすき かけのよろしく 遠つ神 わが大君の みゆき

の 山越す風の ひとりをる わが衣手に 朝よひに

かへらひぬれば ますらをと 思へる吾も 草枕 旅に

山常庭村山有等取  
與呂布天乃香具山  
騰立國見乎爲者國  
原波煙立龍海原波  
加萬日立多都何怜  
國曾蜻鳥八間跡能  
國者

霞立長春日乃晚家  
流和豆肝之良受村  
肝乃心乎痛奴要子  
鳥ト歎居者珠手次  
懸乃宜久遠神吾大  
王乃行幸能山越風  
乃獨座吾衣手爾朝  
夕爾還比奴禮婆丈  
夫登念有我母草枕  
客爾之有者思遺鶴

しあれば 思ひやる たづきを知らに 網の浦の あ  
まをとめらが 焼く鹽の 思ひぞ焼くる わが下ごろ

寸平白土網能浦之  
海處女等之燒鹽乃  
念曾所燒吾下情

反 歌

山ごしの風を時じみぬる夜おちず家なる妹をかけてしぬ  
びつ

山越乃風乎時自見  
寢夜不落家在妹乎  
懸而小竹櫃

○天皇は齊明  
天皇。

後岡本宮御宇天皇代

額田王歌

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出  
でな

熟田津爾船乗世武  
登月待者潮毛可奈  
比沼今者許藝乞菜

○中大兄は天  
智天皇。

中大兄三山歌一首

香具山は 畝傍ををしと 耳梨と 相争ひき 神代より

高山波雲根火雄男  
志等耳梨與相諍競

かくなるらし いにしへも しかなれこそ うつせみも  
妻を 争ふらしき

反歌

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見にこし印南國原

高山與耳梨山與相  
之時立見爾來之伊  
奈美國波良

わたつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜あきらけくこ  
そ

渡津海乃豊旗雲爾  
伊理比沙之今夜乃  
月夜清明已曾

○天皇は天智天皇。

○内大臣藤原朝臣は鎌足。

近江大津宮御宇天皇代

天皇詔内大臣藤原朝臣競憐

春山萬花之艶秋山千葉之彩

時額田王以歌判之歌

伎神代從如此爾有  
良之古昔母然爾有  
許曾虛蟬毛孺乎相  
格良思吉

夫日ノ枕言

冬ごもり

春ざりくれば

鳴かざりし鳥も來鳴さぬ

咲かざりし花も咲けれど

山を茂み入りても取らず

草ふかみ

取りても見ず秋山の木の葉を見ては

葉をば取りてぞしぬぶ

青きをば

おきてぞ歎く

こし恨めし秋山われは

トル

此より枕言

天皇遊獵蒲生野時額王作歌

安野上標野同格

茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

○皇太子は大

海人皇子、

即ち天武天皇。

皇太子答作歌

紫のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも

明日香清御原宮御宇天皇代

○天皇は天武天皇。  
○十市皇女、

十市皇女參赴於伊勢神宮時見

冬木成春去來者不

暗有之鳥毛來鳴奴

不開有之花毛佐家

禮杼山乎茂入而毛

不取草深執手母不

見秋山乃木葉乎見

而者黃葉乎婆取而

曾思奴布青乎者置

而曾歎久曾許之恨

之秋山吾者

茜草指武良前野逝

標野行野守者不見

哉君之袖布流

紫草能爾保微類妹

乎爾苦久有者人嬌

故爾吾戀目八方

夕ヌシ

御母は藤原  
 皇太子の妃と  
 なり給ふ。

○藤原宮御宇  
は持統・文  
武の二代。  
○天皇は持統  
天皇。  
ヤマト

○新古今、第二句、夏きにけらし、第四句、衣ほすてふ。

和  
リ

波多橫山巖吹黃刀自作歌

河のへのゆつ岩むらに草むさず常にもがもとをとめ  
にて

藤原宮御宇天皇代

天皇御製歌

春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天アメの香具山

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂

作歌

玉だすき 畝傍の山の 榎原の  
神武天皇王 ひじりの御代ゆ あれ

ましし 神のことごと 樛ヅの木の いやつぎつぎに 天

の下 知ろしめしを 空にみつ 大和をおきて 青丹  
よし 奈良山を越え いかさまに 思ほしめせか 天ざ

河乃上湯都磐村二  
草武左受常丹毛冀  
名常處女煮手

春過而夏來良之白  
妙能衣乾有天之青  
來山

玉手次飲火之山乃  
檀原乃日知之御世  
從阿禮座師神之盡  
樛木之彌繼嗣爾天  
下所知食之乎天爾  
滿倭乎置而青丹吉  
平山乎越何方御念  
食可天離夷者雖有

雲たれ

かる 鄙にはあれど いはばしる 近江の國の さざな  
みの 大津の宮に 天の下 知ろしめしけむ すめろぎ  
の 神のみことの 大宮は こと聞けども 大殿は  
ここといへども 春草の しげく生ひたる 霞たつ  
春日のさける ももしきの 大宮どころ 見れば悲し  
も

反

歌

フーがなぐ  
春草

さざなみの志賀の辛崎さきくあれど大宮人の船待ちかね  
つ

イ  
舟

さざなみの志賀の大わた淀むとも昔の人にまたもあはめ  
やも

イイマ  
當麻真人麻呂妻作歌

石走淡海國乃樂浪  
乃大津宮爾天下所  
知食兼天皇之神之  
御言能大宮者此間  
等雖聞大殿者此間  
等雖云春草之茂生  
有霞立春日之霧流  
百磯城之大宮處見  
者悲毛

樂浪之思賀乃辛崎  
雖幸有大宮人之船  
府知兼津

左散難彌乃志我能  
大和太與杼六友昔  
人二亦母相目八毛

わがせこはいづくゆくらむ沖つ藻の名張の山を今日か越  
ゆらむ

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣

人麻呂作歌（短歌四首の中）

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月  
かたぶさぬ

藤原宮御井歌

やすみしし わご大君 高てらす 日のみこ あらたへ  
の 藤井が原に 大御門 はじめ給ひて 埴安の 堤の  
上に あり立たし 見し給へば 大和の 青香具山は  
日の經の 大御門に 春山と しみさび立てり 畝傍の  
このみづ山は 日の緯の 大御門に みづ山と 山さ

東野炎立所見而反  
見者月西渡

八隅知之和期大王  
高照日之皇子麗妙  
乃藤井我原爾大御  
門始賜而埴安乃堤  
上爾在立之見之賜  
者日本乃青香具山  
者日經乃大御門爾  
春山跡之美佐備立  
有畝火乃此美豆山  
者日緯能大御門爾

吾勢枯波何所行良  
武已津物隱乃山乎  
今日香越等六